G・マクドナルドの Scottish Identity の背景

——スコットランドの歴史・宗教と マクドナルドの幻想文学——

相　浦　玲　子

はじめに

ジョージ・マクドナルド（George MacDonald, 1824—1905）は，近年，本国イギリスはもとより，アメリカ，カナダなどにおいても見直され始めている作家である。彼は晩年，テニソン（Alfred Tennyson, 1809—1892）やラスキン（John Ruskin, 1819—1900）らと親交があり，彼の生きていたヴィクトリア朝時代には注目された作家の一人であったが，その後，『不思議の国のアリス』（*Alice in Wonderland*）の作者ルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832—1898）や『指輪物語』（*The Lord of the Rings*）の作者トールキーン（John R. R. Tolkien, 1892—1973）らの活躍の陰にかくれたかっこうになってしまっていた。しかし実は，これら後出の偉大な幻想作家たちは，イギリスの幻想小説の草分け的存在であるマクドナルドの影響を少なからず受けている。ルイス・キャロル（本名，チャールズ・ドッジソン，Charles Dodgson）はマクドナルドと親交があり，彼の『アリス』の作品は最初，マクドナルド家の子供達によって読まれ，それが世に出たといういきさつがある。後にマクドナルドの伝記を書いた息子グレヴィル（Greville MacDonald）は当時の模様を生き生きと伝えている。

> It was about this time〔summer, 1862〕, . . . that he〔Lewis Carroll〕asked my father's opinion upon a story he had written and named *Alice's Adventures Underground*, illustrated with pen-and-ink sketches by himself and minutely penned in printing characters. My father suggested that an experiment should be made upon his young family. Accordingly my mother read the story to us. When she came to the end I, being aged six, exclaimed that there ought to be sixty thousand volumes of it. Certainly it was our enthusiasm that persuaded our Uncle Dodgson, as we call him, to present the English-speaking world with one of its future classics, *Alice in Wonderland* . . . . [1)]

マクドナルドの作品にも，ルイス・キャロルの『アリス』を連想させるアリスという少女が登場する作品があったりする。[2)] またトールキーンはマクドナルドから直接，影響を受けたと見られることを嫌ったが，彼の偉大さは認めている，

> The magical, the fairy story . . . may be a vehicle of Mystery. This is what George MacDonald attempted, achieving stories of power and beauty. [3)]

また，C・S・ルイス（C. S. Lewis, 1898—1963）は，マクドナルドの生存中に会うことはなかったが，常に彼を高く評価していた。

> Most myths were made in prehistoric times, and, I suppose, not consciously made by individuals at all. But every now and then there occurs in the modern world a genius—a Kafka or a Novalis—who can make such a story. MacDonald is the greatest genius of this kind whom I know. [4)] . . . I have never concealed the fact that I regarded him as my master . . . . [5)]

他の作家たちと，このようにかかわっていたマクド

ナルドは，どのような生涯をおくり，どのような背景を持っていたのであろうか。一時は牧師であった彼が終生，持ち続け，その作品に色濃くあらわれるのは，独自の宗教観と，彼がケルトの子孫であり，スコットランド人であるという自覚である。日本においては，ともすれば，英国，即ちイングランドと考えられがちで，他の旧ケルト三国——(北)アイルランド，ウェールズ，スコットランド——に対する理解がうすく，それぞれがケルト文化圏の中で個性的な文化を持っていることはあまり知られていない。だが，スコットランドの歴史的・宗教的背景を知らなければマクドナルドの文学を理解することは難しい。

スコットランドは，かつて独立した王国であり，たとえば，エリザベス一世がイングランドを統治していたころ，スコットランドではメアリ女王（Mary Stuart）が王位にあったわけである。この国は同じブリテン島にありながら，長い間，イングランドとは異なる独自の文化を保ってきた。その伝統は新しく英国という一国に統合（Union）がなされてからも存続している面が多く，同じく，いったんは英国の一部となったアイルランドの大部分がエール共和国として再び独立したように，スコットランドの中にも，独立を望んだり，あるいは少なくとも，もう一つの議会をエディンバラに設けるべきであるという声がある。[6] マクドナルドは独立運動に関与したり，政治に直接的に参加をしたようではないが，彼の宗教・文学を通じて根本テーマの一つである〝帰るべき故郷〟という発想は，抽象的であるにしても，スコットランドの人々が背負ってきた歴史と無関係ではないようである。

この小論では，特にマクドナルドのスコットランド出身であるという自覚—Scottish Identity—をよく理解するために，まず彼の生涯を概観したのち，（一般によくなされるイングランドからではなく）スコットランドから見た歴史の一端を，マクドナルドにゆかりのある事柄をまじえながら見てゆきたい。

Ⅰ．ジョージ・マクドナルドの生涯

ジョージ・マクドナルドは，1824年，12月10日，スコットランド東北部，アバディーン州（Aberdeenshire），ハントリー（Huntly）の生まれである。彼には五人の兄弟があったが，母親は彼が九歳の時に亡くなっている。父親は再婚し，子供達とこの母とは非常にうまくいっていたようである。しかし母の死という出来事は，マクドナルドの後の女性観に大きな影響を与えたと言われている。父親は小規模な織物業経営者であったが，六人の子供をかかえ小さな家（“Bleach Field Cottage”と呼ばれた一あたりに漂白業者が多かったので一）に住むことを余儀なくされ，決して裕福ではなかった。彼の家庭は厳格なカルヴィニズムの伝統を守っていて，特に父方の祖母は，宗教的理由から芸術に対して理解がうすかったと言われている。たとえば，孫ジョージのヴァイオリンをある日，焼いてしまった。というのは，この当時の過激なカルヴィニズムにとって，音楽は神への祈りを妨げる以外の何ものでもなかったからで，スコットランドのある地方の教会では，伝統的なバグパイプの演奏を禁じたところもあった。[7]

ジョージ・マクドナルドは，1840年，奨学金を得てキングズ・カレッジ（King's College, Aberdeen）に入学し，化学，博物学等を学ぶ。1842年から一年間学資が続かなくなり休学して中学校で算数教師をするが，1845年には大学を卒業している。この間，アバディーンの日曜学校でケネディー博士（Dr. Kennedy）という独立派の牧師（Congregational Church に属する）から影響をうけたことは，マクドナルドのカルヴィニズムからの脱却にとって大きな意味をもつ。息子グレヴィル（Greville MacDonald）によると，彼は化学に大変興味をもっていてドイツでさらに研究をしたいとさえ考えていたということであるが，経済的にとてもかなうことではなかったという。[8] しかし何よりも彼の生い立ち—特に宗教的背景—と，大学時代に目のあたりにした町の人々の貧しさ，そしてケネディ博士からの影響は彼に召命感をいだかせ，牧師の道を歩ませることになる。[9] 1848年，知り合いがいたことも手伝って，ロンドンのハイベリー・カレッジ（Highbury College）という神学校に入学し，すでに学位があったため，四年の課程を二年で終えた。1850年，イングランド南部のアランデル（Arundel）の教会（Trinity Congregational Church）で牧師となり，1851年3月には，知り合いの妹，ルイーザ・パウエル（Louisa Powell）と結婚する。このころ，以前から発病していた肺病にひどく苦しみ，結婚も危ぶまれたくらいであった。1852年，早くもこの牧師に対する批判が一部から出始めた。たとえば彼の「神の意志を実行する者は，異教徒であっても死後，神の国に迎えられる。」というような大胆な説教や彼のいわゆるドイツ神学への傾倒が，[10] 指導的役割を果たしていた教区民たちを彼から遠ざけた。彼らから俸給を減らされるなどのいやがらせをうけて，彼は1853年5月，この教会

での職を辞した。

彼は新しいポストのあてもなくマンチェスターへ行くが，そこで南イングランドの美しい町と異なる工業都市を見ておどろく。しかし友人の助けもあって，この町に自由な雰囲気を感じ，彼を牧師として迎えてくれる教会がなくとも，自由に説教ができる場がもてそうに思われた。[11] 職を失ってマンチェスターに暮らした二年半は，失望と希望の連続であった。ここで幸運だったことは，彼が出版した *Within and Without* (1855年) が，詩人バイロン (George Gordon Byron, 1788—1824) の未亡人 (Lady Byron, 1792—1860) に認められ，経済的援助を受けることとなったことである。奇しくもバイロンの母方の祖先は，スコットランドの有力豪族，ゴードン家であり，バイロンは少年時代，アバディーンで学校に通っていたことがあった。マクドナルドは，1858年，代表作の一つである *Phantastes* を出版する。1859年，ロンドンのベッドフォード・カレッジ (Bedford College) に英文学の教授職を得た。ここでようやく生活にゆとりができるようになり，文芸界に多くの友人をつくるにいたった。1867年には，主に子供向けのファンタジー *Dealings with the Fairies* (後に *The Light Princess and Other Stories* と改題)，1870年に *At the Back of the North Wind*, 1871年に *The Princess and the Goblin*, そのシリーズの *The Princess and Curdie* が1877年に出版された。これらの作品は子供向けとはいっても，たとえば，*At the Back of the North Wind* のように，最後に幼い主人公が"死んで"しまうというストーリーは，時に深遠であり，大人でも一時，立ち止まって考える必要のあるような作品が多い。この主人公の死は「死」そのものではなく，「死」を通して得られる「再生 (新生)」を意味し，復活を暗示しているのである。*The Princess and Curdie* といった，いかにも幼少者向きの表題の作品は，たしかにストーリーの展開の魅力によって子供たちをひっぱってゆくが，最後はハッピー・エンドではなく，王国の崩壊が描かれている。しかしこの崩壊の真相の受けとめ方は，読者に任されており，真の理解は作者の宗教観を通して初めてなされうる。マクドナルドはこれらの作品の端ばしで，彼が説教壇で語り得なかった，いわば無言の説教をわれわれに語りかけている。晩年の1895年に出版された *Lilith* は，*Phantastes* と並び称せられる大人の幻想文学であるが，彼の宗教観——すべての者に対する救済——が神秘的な迫力を持って描かれている。

彼の生涯の大半は十一人の子供をかかえて，病いと貧困とのたたかいであり，病いはしばしば彼の生命をおびやかしたが，長寿を全うして，1905年，9月，80歳でサリー州のアシュテッド (Ashtead, Surrey) で没した。

II. スコットランド小史

1. スコットランドにおける布教の始まり

スコットランドにおける布教の歴史は，アイルランドを経て，スコットランド西海岸にあるアイオナ島 (the Island of Iona) から始まったといえよう。地理的にアイリッシュの影響の色濃い所であるが，いずれにしても，ヨーロッパにおけるキリスト教の"もうひとつの"中心地であった。もちろんいまひとつの中心はローマである。当時まだ，カトリックとプロテスタントという分裂は存在していなかったが，スコットランドのキリスト教の特色は，イングランドのようにローマから伝えられたものではなく，ケルトの布教の中心地，アイルランドより伝道されたという点にある。A.D. 6世紀頃，アイオナ島のコロンバ (St Columba) は，スコットランド各地に宣教師を派遣した。この中にマカー (St Machar) と呼ばれる人物がいたが，この人は，スコットランド東北部のアバディーン (Aberdeen) へ布教に行った。アバディーンの名は，もともとこの地方を流れる二つの大きな川，ディー川 (River Dee) とドン川 (River Don) の名を合成してできたものである。伝説によるとコロンバはマカーを東部へ派遣する際，川が海に近いところで司教の笏杖(しゃくじょう)のように曲っているところまで行くように命じた，とある。ちょうどドン川は，北海にそそぐ手前で大きく弧をえがいていて地図でみると，杖のように見えなくもない。これが偶然の一致か，後世の作り話かは今となっては確かめようもないが，この地が昔はケルト文化の中心の一つとして栄えたことはたしかである。時代が下って1131年頃，St マカーが基を築いたこの地に St マカーズ教会 (St Machar's Cathedral) が建設され始めた。[12] 過去のスコットランドの諸外国に対する関係をよく表わしているものがこの教会に今も残っている。それは各国の紋章である。ずっと時代が下って1520年頃，この教会の大天井に，当時，この教会やスコットランド王国に関係の深かった諸国，諸都市，有力者等の紋章が48個，描かれた。縦3列に16個づつ並んでいるのであるが，この順序が興味深いのである。左端の列は諸国の紋章を描いた列で，まずその先頭は，神聖ローマ帝国の双頭のワシの紋章，次は意外にも地続きの"隣国"イングランドではなくて，フ

ランス王のもの，そして三番目はスペイン王のもの，やっと四番目にイングランド王（当時：ヘンリー八世）の紋章が描かれ，以下，デンマーク王（地理的に大変近い），ハンガリー王，ポルトガル王，という風に当時の外交関係の緊密度がうかがいしれるのである。[13)]

2. 宗教改革の波紋[14)]

この天井の紋章が描かれた時期は，1517年のルターの95カ条文によって口火が切られた，宗教改革の運動をかかえたキリスト教にとって大きな試練の時であった。また，それはスコットランド王国にとってもイングランド王国にとっても内政上，大きな問題をかかえた時期であった。1513年，イングランドとたたかっていたスコットランド王，ジェームズ四世（James Ⅳ）が戦死し，その子，ジェームズ五世が幼少（17ケ月）で王位を継承する。イングランドはテューダー王朝（Tudor）のヘンリー八世（Henry Ⅷ）で，当時彼は，アラゴンより嫁した妻のキャサリン（Katharine of Aragon）と離婚し，アン・ブリン（Anne Boleyn）と結婚したいと考えていたが，これが教皇によって拒絶されたため，ヘンリー八世はローマン・カトリックと関係を絶った。このとき彼は，地続きのスコットランドをもローマン・カトリックから切り離したいと願ったが，スコットランド王，ジェームズ五世は，全くその意志がなくカトリックにとどまり，教皇との関係を保った。しかし，スコットランド内の諸侯の中には，新教に傾倒するものも多くなり，内外の圧力によってジェームズ五世は，カトリック国，フランスとより緊密度を増すことになった。そのため，1537年，フランス人の王女，マドレーヌ（Madeleine）と結婚するが，この花嫁はスコットランド到着後，数ケ月で亡くなってしまったため，今度はフランスの有力貴族，ギーズ公（Duke of Guise）の娘，メアリ（Mary）と結婚した。このフランスとの新たな関係はイングランドのヘンリー八世を恐れさせ，また怒らせることになる。1542年，ジェームズ五世は増大する新教勢力と戦うことになったが，惨敗して多くの諸侯をヘンリー八世の捕虜にされ，間もなく失意のうちにこの世を去った。

3. スコットランド女王，メアリ・ステューアト

ジェームズ五世の死後数年間，スコットランドは混乱状態におちいった。彼の娘，メアリが幼少であったため，彼女の母，つまりジェームズ五世の王妃——フランス生まれでカトリックの——ギーズのメアリ（Mary of Guise）が勢力をふるおうとしたが，彼女はヘンリー八世がスコットランドをイングランドの支配下に置こうとするのと同じくらいの勢いで，スコットランドを生国フランスの支配下に置こうとし，プロテスタント勢力を迫害した。その間イングランドでは，ヘンリー八世が没し，病弱のエドワード六世（Edward Ⅵ）の6年間の王位継承のあと，ヘンリー八世とカトリック信者キャサリンとの間の娘，メアリ・テューダー（Mary Tudor）が治め，イングランドにカトリックが復興しつつあったが，このメアリが1558年に亡くなり，ヘンリー八世とアン・ブリンの娘，エリザベス（Elizabeth Ⅰ）が王位につくにあたって，再びプロテスタントが勢いをもり返した。この年，スコットランドの女王メアリ・ステューアト（Mary Stuart）は，フランスでフランス王の長男と結婚する。そして翌年，プロテスタントの旗手，ジョン・ノックス（John Knox）がスコットランドに戻ってくることによって新教はますます勢いをつけて増大した。一方，カトリック勢力は，プロテスタントのエリザベス一世をイングランドの正統な女王とみなさず，スコットランドのメアリを，スコットランド，イングランド，アイルランドの女王とみなしていた。これはメアリの祖母マーガレット（Margaret）がヘンリー八世の実妹でありテューダー家直系の血筋であるのに対して，カトリック勢力は，ヘンリー八世とアン・ブリンとの結婚を正当とは認めず，したがってその子エリザベスを正当な王位継承者と認めていなかったからである。しかし，かえってこのことがエリザベスを刺激し，彼女のスコットランドに対する干渉をまねくこととなった。1560年，ついにスコットランドの議会において，新教を国教とみなす宣言がなされた。そしてプロテスタントのスコットランド教会を確立するためにまず，牧師を養成する教育機関の必要性が出てきたり，またその他の事情から，評議会（General Assembly—諸侯，都市の代表，牧師らで組織される）がつくられ，この後，教会と大きくかかわってゆくこととなる。

フランスにとどまっていたメアリ・ステューアトが1561年，帰国するが，事態は変えられないところまできていた。こうしてスコットランドに，民衆の大半はプロテスタント，女王がカトリックという状況が生まれた。プレスビテリアニズム（Presbyterianism）が"民主的"であるわけ，あるいはそうならざるを得ないわけは，他国と異なり"王"たる者が明らかにその宗教の長としていただくことのできないカトリックであったということにも原因があるといえよう。

メアリは最初の夫，フランソワ（François Ⅱ）と死別した後，いとこのダーンリー（Darnley）と再婚するが，秘書リッチオ（Riccio）との仲を疑われて不仲となり，後にはこの夫が暗殺されたことによって彼女にその嫌疑がかけられる。そしてボスウェル（Bothwell）という貴族と三度目の結婚をすることになる。夫殺しの容疑と，プロテスタント勢力に追われ，メアリはついに，イングランドのエリザベス女王に助けを求める。エリザベスはメアリがスコットランドにある時には，国内の反乱の制圧などの援助もしていたが，かねがねメアリがイングランドの女王をも名のったことなどから，メアリのイングランドにおける勢力拡大を恐れて，彼女を投獄するにいたった。そして1587年，メアリ・ステューアトはエリザベスによって処刑された。

4. スコットランド王，ジェームズ六世

メアリの死後，エリザベス女王と，メアリの息子であるスコットランド王ジェームズ六世（James Ⅵ→James Ⅰ）は和解し，1603年のエリザベス女王の死によって，彼はイングランドの王も兼ねて，ジェームズ一世と改名する。ここに，スコットランドとイングランドの統合への一歩が始まった。宗教的にはすでにプロテスタントであった両国であるが，スコットランドに根づよいプレスビテリアン（Presbyterian）とイングランドのエピスコペイリアン（Episcopalian）という二つの教派は統一しえなかった。この後，彼の息子，チャールズ一世（Charles Ⅰ）は，議会によって処刑され，クロムウェル（Cromwell）の率いる共和政時代が6年続き，再びステューアト王朝が復活する。

5. グレンコーの大虐殺

しかし相変らず，スコットランド内でもたくさんの対立があり，たとえば，"グレンコーの大虐殺"（Massacre at Glencoe）として知られる陰惨な事件が起こったりした。これは1692年，スコットランド西部，アーガイル州（Argyllshire）のグレンコー（Glencoe）で起こった出来事である。ハイランド地方のマクドナルド一族が，当時の王，ウィリアム三世（William Ⅲ）に，忠誠を誓うにあたり，悪天候が災いして決められていた時刻に間に合わなかった。ここで誤解が生じ，ウィリアム王の政府は，これを見せしめに使おうとして，別のハイランドのキャンベル一族（Campbell）をグレンコーへ送りこんだ。この両家―マクドナルド家とキャンベル家―は歴史をたどると宿敵ではあったが，キャンベル一族がやってきたときマクドナルド一族は，ハイランドの慣習どおり，旅人をもてなした。にもかかわらずキャンベル一族は，何の予告もなく無差別にマクドナルド一族に攻撃をかけ，無防備な老若男女の38人を虐殺した。これは一見，氏族（Clan）同士の対立だけに起因しているようにみえるが，それのみにはとどまらず，客人に開放的であったハイランドにおいて，その事件の後，疑心暗鬼の複雑な心理的傷跡を残すことになった。

ジョージ・マクドナルドは，息子グレヴィルの伝記によると，先祖がドナルド一族（Clan Donald）であったということである。またグレヴィルは，マクドナルド家の先祖には現に，グレンコーの大量虐殺事件から生きのびた人物があるということ，また，ジョージの祖父にあたる人は，スコットランドがその独立を完全に失うこととなったカロデンの戦い（後述―1746年）の3ケ月前に生まれたと述べている。ジョージの母方の先祖もやはりケルト系（Celtic）であり，彼の伯父は，マッキントッシュ・マッカイ（MacIntosh Mackay）という名高いゲール語学者であり，ジョージはこの人から多大な影響を受けたようである，とグレヴィルは述べている。[15)]

6. 17世紀，スコットランドの状況

17世紀には，ステューアトの血統内での王位をめぐる争いが激化し，イングランドにおいてもスコットランドにおいても反対者が存在した。国王を共有するという形態に加えて，エピスコペイリアンの勢力が国王と結びつくということに対して，特にスコットランドにおいて宗教的な反発が強かった。イングランドのピューリタンとスコットランドの改革者たちは一時，王政を廃し，クロムウェル親子の共和政治を経験することになるが，その苦い経験のあとは，両国とも1660年のチャールズ二世（Charles Ⅱ）による王政復古を歓迎した。イングランドは全体としてエピスコペイリアンの教会の再確立を受け入れていたが，チャールズ二世の政権は1679年から1681年のあいだに，教皇寄りの姿勢をとりつつあるとウィッグ党（Whig Party）の反対をうけた。

一方，スコットランドでは，その多くがプレスビテリアン信者であり，司教の再現は不自然であり，容認しがたいようにうけとられた。これが積極的な，対立として表面化してくるとき，中央政府は，Episcopacy（監督制度）をうけいれないプレスビテリアン達を迫害し始め，また過激なプレスビテリアンは反乱を起こし始

めた。チャールズ二世が亡くなり，弟のジェームズ七世（James Ⅶ → Ⅱ）が王位を継ぐが，彼はれっきとした，ローマン・カトリック信者であり，これに対しては，プレスビテリアンもエピスコペイリアンも各々の礼拝形態をくずされ，ひいては再び英国がカトリック国にされるのではないかと危惧し始めた。ジェームズ七世（二世）は懸念されたとおり，着実に彼の信仰を国家的に導入しようとしたが，彼の反対者にとっての唯一の希望は，王位継承者である二人の娘，メアリとアンがプロテスタントの信仰によって育てられ，プロテスタントの王子達と結婚していたということである。しかしこの希望も，ジェームズの二度目の妻（カトリック信者）が1688年に男の子を生んだことによってくずされてしまう。この子はジェームズ・フランシス・エドワード（James Francis Edward）という。しかしこの頃，ジェームズに対する反対がスコットランド，イングランド両国に強まり，ついに王は王座を追われ，娘のメアリとその夫のオランダ王，ウィリアム（William Ⅲ）の共同統治に道をゆずることとなった。

このプロテスタントの勝利は，大多数の人々に歓迎された。ことにイングランドにおいては，このことは問題とならなかったが，ステューアトの支持者の多いスコットランドにおいて，特にハイランド地方においては，源流の復権を求める声がつよく，ジェームズ擁護の戦いにたち上がった（ジャコバイト運動，Jacobite Movement = James 王の復位を求める運動。 "Jacobite" は Jacob = James からきている。）が，失敗し，ここにウィリアム王に表だって反対する者は消えた。しかしスコットランドでは，この政体に対する不満がつのるばかりで，特に伝統的に，イングランドに対するよりも関係の深かったフランスを敵にして，ウィリアム王の関心事のために大陸で戦わねばならなかったということは，民衆の心に疑いをいだかせることになった。このような不満がつのればつのるほど，追放された王に対する郷愁がつよくなった。そしてイングランドもこの危険性には気づき始めた。この時点では，スコットランド議会は，ウィリアムとメアリの共同統治，そして続くアン女王（Anne）の治世を追認する形をとっていたが，スコットランドは，イングランドと同じ為政者をいただかなければならないという協定も法も決して存在しなかった。イングランドでは，このままでは独立した存在であるスコットランド議会は，イングランドと無関係に，追放されたステューアトの王をスコットランド王に連れ戻すのではないかという強い懸念がおこった。イングランドは，ステューアト家の血統がながれているとはいえ，ハノーヴァー朝（Hanover）であり，プロテスタントであるのに反して，ひょっとするとイングランドにとっては宿敵のフランスと近しい，ローマン・カトリックの国が再びスコットランドに誕生するのではないかと思い始めたのである。

7．ジャコバイト運動とイングランドとの統合

スコットランドに新たな王を誕生させないための唯一の打開策は，二王国が一人の王を共有するだけでなく，議会も統一してしまうことである，とウィリアム三世は悟ったのであるが，これが実行に移されたのは，アン女王の治世にはいってから，1707年のことであった。これはアン女王に後継者がいなかったことから，スコットランドにもその際の混乱を予想して，譲歩を認めるきざしがあったためである。もちろん，スコットランド内で根強い反対はあったが，もし完全に両国の関係が絶たれた場合の経済的，政治的問題があまりに大きいことから，次善策ともいうべき妥協から生まれたものであった。しかし書類上は，平等なような統合（Union）も，実際はイングランドに有利であることが明白化しだした。統合によって期待されていた商業の発展や教会の安定化は実現しなかった。この統合は事実上，ハノーヴァー家の世襲を意味するものであったから，現状への不満をもつスコットランド人にとっては，ステューアト家は救いの主のように思われた。プロテスタントのハノーヴァー朝を支える党としてウィッグ党があったが，スコットランドでは事情が複雑で，スコットランドのウィッグ党の支持者で，プロテスタントの王を歓迎する者の中には，この統合にうんざりしている者もあったし，"統合"に反対するトリー支持者でもローマン・カトリックの王の治世は好まないという者もあった。

ウィッグ党は，アン女王亡きあとの王として，ハノーヴァー選帝侯のジョージ（George）を，トリーはジャコバイトのジェイムズ・フランシス・ステューアトを考えていた。ジェームズは当然，フランス王や教皇の支持を得ていた。人間的魅力に欠ける面があったといわれてはいるが，彼がエピスコパルの信仰を持っていたならば，多数の支持を得たことであろう。

アン女王は後年，力をたくわえすぎたウィッグ党を一掃し，今度はトリー党から大臣を選んだので，王位はハノーヴァー家に決まっていたものの，ジェイムズ

が名のりをあげれば，ステューアト朝復古も可能な雲行きとなった。スコットランドのみならずイングランドの多くの地においても，ステューアトに対する同情は強かったのである。

しかし，1714年，アン女王の没後，トリーの指導者が優柔不断でいるうちに，ハノーヴァーのジョージ一世が王の名のりをあげてしまった。そして彼はウィッグ党に負うところが多かったので，トリーの大臣らを一掃してしまった。そして親ステューアト派の軍人たちも免職させられた。

これに続いて，1715年，これまでジャコバイトを支えてきたフランス王ルイ十四世（Louis XIV）が没し，次の王位がオルレアン公（Orléans）にわたると，彼はルイ王の政策を転換し，ジャコバイトへの援助を打ち切った。ジャコバイトにとってこのことは何よりも大きな打撃であった。

アン女王の時代に，一時，回復するかに見えたジェームズのステューアト家の勢いは，ジョージ一世の安泰によっておとろえ，ウィッグが勢力を拡大することとなり，それと同時にトリーのジャコバイト運動に対する支援は激増することとなった。

8．カロデンの戦い

ジャコバイトの蜂起は，大きなものとして，1708年，1715年，1719年，1745年に起こった。スコットランドの国内でも一致した支持は得られず，ジャコバイト派と政府派に分裂していた。ジャコバイト派の企ては，1746年，スコットランド北部，インヴァネス近くのカロデンの野（Culloden Moor）で"政府軍"に敗れ，ついにこの長きにわたった運動も終えんをむかえた。ジャコバイトの蜂起の際，兵士は必ずしも心から参加したわけではなく，たとえばハイランドのある族長が参加するとなると，小作人は仕方なく長に従ったというようなあり様も見られた。結局，政治的には何の変化ももたらしえなかったが，多くのスコットランド人の心の中には，たとえ当時は無関心であった人々にさえ，ロマンティックでセンティメンタルな郷愁を永久に刻むことになった。中央政府は今後の見せしめとして，ハイランド人のシンボルともいうべき，キルト（Kilt）の着用やバグパイプの演奏を禁じた。そしてハイランド地方で話されてきたケルト系のゲール語（Scottish Gaelic）の使用も長い間禁じられた。

9．ハイランド・クリアランス

ハイランド・クリアランス（Highland Clearances）は，19世紀の前半にスコットランド高地地方で起こった一連の事件をいう。具体的には，ハイランドの人々（主に小作人とその家族）が，自分の意志に関係なく，強制的に立ちのきをさせられ，ひいてはカナダなどの海外へまで移住を余儀なくされたり，反抗する者が殺されたりしたことをさしている。この背景にはいくつかの要因が考えられる。

① ハイランドの人口の急増（1831年のこの地方の人口調査の段階までに目をみはる人口増加があった。）

② 新しい家畜種の導入（1800年ごろまで盛んだった羊に代わって，black cattle と呼ばれる人手のかからない牛の新種が飼われ始めた。）

③ 土地の不足（農作物を作るより割のいい羊の牧畜に土地を利用したため，土地が払底して，小作人たちに飢えの危機が訪れた。）

④ 土地所有者の莫大な借金の犠牲として身売りされる小作人が出た。

⑤ 旧領主の放置した土地に新顔の領主が出現してくる。

これらの要素が結びついて，小作人たちは収穫の悪い年などには餓死寸前の状態にまで追いつめられ，海外にいる親類にわずかな望みを託したり，また，悪い業者にだまされて海外移住をする人も出てきた。それがこうじて，悪条件にもかかわらずその土地に住み続けたいと願っている人々までもが強制的に立ちのかされるということがおこってきた。

最も悪名の高いクリアランスの一つは，サザーランド伯爵夫人（Countess of Sutherland）と結婚した，スタッフォード侯（Marquis of Stafford）がサザーランドで行なったものである。最初のねらいは悪意によるものではなく，飢えなどに苦しむ小作人たちを高地地方からスコットランド西海岸へやることによって，漁業などに新しい道がひらけるだろうというもので，はじめのころは，うまくいった例もあったが，次第に小作人との間に対立が激しくなり，後にスタッフォード侯は，60,000ポンドもの大金を使って名誉回復に努めたが，サザーランドから得るものはなく，その汚名をそそぐことはついにできなかった。[16)]

また，1853年には，グレンガリー（Glengarry）で，領主マクドネル（Macdonnell）家が，小作人たちを計画的にいじめぬいて人々を追いだしたという特異な例もある。サザーランドで起こったように，高地地方から西海岸へ移動させたというのではなく，家族全員を船に乗せて，大西洋を渡らせたという。逃亡者は，容

赦なく打ち殺された。[17]

さらに，イングランドとの統合（ユニオン）によって産業革命の波が押し寄せ，生活の変化を余儀なくされたことも，貧困を深めた原因のひとつであった。ハイランド地方で伝統的に守られてきた，領主と小作人との忠誠の固いきずながこわされ始めたことにも大きく起因している。

10. スコットランドの教会史[18]

その後のスコットランドの教会の歴史をふりかえってみたい。1707年の統合（Union）のあとも，スコットランドにおいては，1690年の時点のプレスビテリアンのスコットランド教会（Church of Scotland, the Kirk とも呼ばれる）の地位はゆるがなかったが，1712年にイングランドにある中央政府によって，プレスビテリアンの基本原則であるはずの会衆による牧師の選択の権利を骨抜きにされてしまった。18世紀は分裂分派の時期であった。当時スコットランドでは司法権は教会にあった。スコットランド教会（the Kirk）のあるものは，政府からの司法に対する援助を望み，あるものは全く中央政府の支配からは教会を切り離すべきだと思い，またあるものは，カルヴィンの原点に立ち戻るべきだと主張した。1761年，政府からいかなる介入も援助も受けないとする，リリーフ・チャーチ（Relief Church）が形成された。また新しく興ってきた工業都市や，新しくひらかれた植民地の異教徒たちに熱心に布教をすすめる人々は，福音主義者（Evangelicals）と呼ばれた。ついには1843年，この福音主義者たちは，スコットランド教会と袂を分かつ決意をした。この時，福音主義者たちと共に教会組織を去った牧師は，40%にのぼるといわれている。[19] 厳格なカルヴィニズムを推進する勢力として，一見，矛盾するようだが，この運動はフランス革命の波と無関係ではなかった。しかし後に，政治的には保守化した。他方，このときスコットランド教会にのこった人々は，穏健派（Moderates）と呼ばれたが，彼らが中央政府と一体化しすぎた例として，ハイランドの軍隊で兵士たちに，ゲール語で説教することを禁じたりした。[20]

福音主義者たちは，新しい教会をスコットランド自由教会（Free Church of Scotland）と名づけた。1929年になって再び彼らは，元のスコットランド教会に復帰するが，この後，主導権をとったのは，むしろ旧自由教会派の人々であった。それ以来，スコットランド教会[21]は，スコットランド最大の信者数をもつことになるが，現在でも，自由教会の伝統を守っている教会があり，ローマン・カトリックの信者の数も少なくない。

むすび

このような背景にあってジョージ・マクドナルドは，彼自身，カルヴィニズムの中で育ちながらこれに疑問をいだき，独立派と呼ばれる教派（Independent あるいは，Congregational）の牧師となった。彼の生きた時代というのは，スコットランド教会成立以後の宗教的過渡期であったといえよう。マクドナルドは，健康上の理由もあったが，自らスコットランドの外へ出て，イングランドで後半生を過ごした。彼はケルトの子孫であることの強い意識と，スコットランドの栄光と敗北の歴史の強い認識，たとえば，自らの祖先と結びつけられるグレンコーの大虐殺，カロデンの戦い，ハイランド・クリアランス等の悲惨な歴史を決して忘れてはいなかった。ただ彼は，それを自らの内面で受けとめ，宗教や文学を通じて，故郷を喪失した者への救い，精神的な故郷回復への旅を描きつづけた。彼は，夢と現実，生と死の壁を超越した幻想文学（fantasy）を生み出すことによって，夢が現実になるというより，現実が夢となるべきであり，[22] 本当の生は死を通してこそ得られることを描こうとした。もはや彼自身の個人的経験を超えて，弱い者，心の中で故郷を失なっている者，ひいては楽園をうしなった全人類の帰るべきところを幻想文学の中で示そうとしたのであった。（続篇予定）

注

1) Greville MacDonald, *George MacDonald and His Wife*, London : George Allen & Unwin Ltd., **342** (1924). ただし，ルイス・キャロルが『アリス』を書いた直接の動機は，やはり友人のヘンリー・リドル（Henry Liddell）の娘達に読ませるためであったといわれている。
2) George MacDonald, "Cross Purposes," *The Wise Woman and Other Fantasy Stories*, Herts : Lion Publishing, (1980) の主人公のひとり。
3) J.R.R. Tolkien, MacDonald's *Lilith*, London : Ballantine Books, Limited, cover page, (1969).
4) C. S. Lewis, preface to *George MacDonald : An Anthology*, Glasgow : Collins, xxviii (1947).
5) *Ibid.*, **xxxii.**

6) *Ex.* Christopher Harvie, *Scotland and Nationalism*, London : George Allen & Unwin, (1977).

7) Greville MacDonald, *George MacDonald and His Wife*, **29**.

8) *Ibid.*, **70**.

9) *Ibid.*, **68—71**.

10) *Ibid.*, **178—9** "There were two charges against him. The first was a sermon he had preached from the text, 'He that doeth my will shall know of the doctrine,' in the course of which he had expressed his belief that some provision was made for the heathen after death.

The second was even more shocking, and probably originated in his *Songs of Novalis:* he was tained with German Theology."

11) *Ibid.*, **194**.

12) The Kirk Session of the Cathedral Church of St Machar, *Old Aberdeen—Burgh・Cathedral・University*, St Ives, Huntingdon, Cambs : Photo Precision Ltd., **5** (1978).

13) *Ibid.*, **16—17**.

14) 『Ⅱ・スコットランド小史』における，これ以下の章では特に示されない限り，以下の文献を参考にした：

T.C. Smout, *A History of the Scottish People 1560—1830*, Glagow ; Collins, (1979).

P.&F. Somerset Fry, *The History of Scotland*, London : Routledge & Kegan Paul, (1982).

Rosalind Mitchison, *A History of Scotland*, London : Methuen, (1970).

J.D. Mackie, *A History of Scotland*, Harmondsworth : Pelican Books, Penguin, (1979).

M. Adams, *The Scottish Historical Review* Vol. **xix No. 75**, (1922).

15) Greville MacDonald, *George MacDonald and His Wife*, **38**, **40**, **46**.

16) J.D. Mackie, *A History of Scotland*, **323**.

17) *Ibid.*, 323. 及び R. Mitchison, *A History of Scotland*, **377**.

18) この章では特に，P.&F. Somerset Fry, *The History of Scotland* に負うところが大きい。

19) *Ibid.*, **215**.

20) Rosalind Mitchison, *A History of Scotland*, **369**.

21) スコットランド内ではスコットランド教会，外ではプレスビテリアン教会と呼ばれる。エピスコペイリアンという呼び名はイングランド外で用いられ，イングランド内ではアングリカンと呼びならわされている。

22) "Our life is no dream ; but it ought to become one, and perhaps will." G. MacDonald, *Phantastes*, Suffolk : The Boydell Press, **165** (1982). これはもともと Novalis からマクドナルドが引用して繰返し採用している一節である。